HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮年中行事調査
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1944-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77333
Type	manuscript
Note	昭和 19年 5月、ノート、 39頁。
File Information	D007_01195.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

NOTE BOOK

昭和十九年五月

朝鮮年中行事調査

咸鏡北道明川郡
平安南道順川郡

文運堂製

明山郎下雪面明山洞

一月

佐賀平野に低くすはる肥前の国脊振をやゝ北
十二月上旬より二月まで雪の降りつもる。
二月十五日過ぎから二月末まで雪の降り
いなの地肥を宋から畑まで運ぶ。一反十五メ位 牛車でかへる。
又一年間の苗の運搬をする。(十二月上旬より一月末まで)

脊振の苗は第一年二月より(月末にかけて)この山から。
二月の坂肥運びはクムサラ(四)に入れて牛車にかける。
一反に七メより十メまで運べる。
苗は陸の(月ん山に行って代し山に植える。
二月ん山から出てまる。平均一戸三百五十株。
五百束もいるところ(大宋流の宋)
自宋の山あんばるの山で他人の山は何人かで
共同して宋って代る。山まで一里以上のところもよく
ある。平均一里。牛で運ぶ。一反で十二束半位。
四月中は雪が大作業でみる。
植宋は毎日二十三束。

以上十二月始めから五月末迄

肥前国脊振は二月末乃至三月になるとすぐ
苗を植える。牛車は無い。牛で運ぶ間やらな
ければならないからはとても遅くなる。
苗運び肥料運びは牛車男がやる。

四月九日と十日の二日は休む。十四日早朝出て
十四日の晩に一番の船で帰郷した。各所にある
部落は十四日の晩食べはやる部落を「ナ」
焚く。その中のかたまりを十二仏並べ。羽二日の朝
その火の色の色を見て寒さ。灰色の時分には
雨、曇りの日は平に。山灰の色合を見る。
大抵の家でやる。これを脱セキと云う。

執行をのみて飯は和尚を行う。それを飯頭として
食事の世話をしてはいけない。

十五日の昼はドンと致誠を行う。それは
山中の祝い。夕方の多く致誠。雲年の祈り
病祈願している。山神は部落毎に。
山神は致誠の場所は牛馬入らない山。牛馬
かうたい位置深く清浄な山の高。神仏は
行しない。
致誠をよむ。大体は左程。
祭官は別にたく、各戸毎に一人一人行く。祝詞
をよむ。
祝詞の長さ四のすえ。むの祝詞をよむ。
その人は自知にきそうそのあの河合ちない。
ぶ物は豚と牛。ナマと煮たよの平に。四十斤な
ぶ四十斤合して献ずる。飯を供へる。今は豚。
酒も。
祝詞のために生きう奉仕をする。
各戸飯と餅一切つ、まつて行って祝ふとそうもする。

改選の時期は毎年五月一日に行う。

等級の準備する人は部落の有司なり。

役員は二組とす。各戸主人のよむもの代表のよむ。

役員は部落の公務を執行する人にして当日同会せず。葬式の会

行かぬの公務の準備する人と知り。各戸の同意する

人は二名とす。任期一年とする。事任公員

とそれを云う。この二人は公務の事やるのでたと一般

部落の公務をやる。区長の命令に従う事。

事任公員の選定は区長するか、第任者か指名す

るか、事任は部落の一番の人望ある高齢者

公員は若い人、今の区長は行政的で

ある、部落の任務は同じ。

部落の会議の時の代表、不良者の制裁他部落

との交渉。事任は必ずしも役員を選むとは限らぬ。

公員は公務の準備をやる。事任は必ずしも任期

ではない。

各戸で選む役員は他のと大体同じ。他のは部落

各戸で選む役員を選ぶ。

他のは世帯と病院数いか改善とをやる。

代人の場合はやさしあたり新りたい。

第村の形式は西と同じ。

改選の場所は半島の入り口と二つを選ぶ。

人は三の山にしてもよい。改選の時代人は

行かぬ。木はやらぬ。その下位の時

改造は平たくしてある。古木は接ぎ木する

植るものより古のは平、二月。

(1)

その神聖な範囲は神域としてはならぬ。牛馬はのるべからざるものである。
その坊ではその坊で尚家に飲酒を命じ人かやるか
居いから、公方が内宴を賜ひ、そこから各戸に分け
てやり、各戸で飲酒する。
なん行くは男女の
公方の逆意は試のあとそのほかの公方をやめる。公方の定で逆意。公方し中法以上の家、
逆意かえんする。今公は他は逆意は高年です
から高年公方やる。

十二月末日は新公物の準備で合よ、なん行くはな。

十四日夜は米を定んでつけて病なし。小供も寝
せる。眠かはなゆるくなる。廣くよりのおつます。
これは高城では十二月、ここでは十四日夜
大伝ます弟子やっとか、今はやっとかへ。やって
ある人します。
十二月末日は高弟ではは高おはやっえか今
はやっえ。小供が年上なんおしって初年をよく迎へ
るねん接拝します。食物をとせぬ。

陳設の行事、その夜はそれかんまるう祝祭の

やう。飲み行くはたと。

元日は何かの地を合の丈。形成おはあ
かりはすんれん。美俗ちあとかおしいすて。
十百書の深夜即ち元旦に祝かす。
夜一対の各戸でやる。分宋は家宋に等。
分宋に対して大本宋のすを文言宋と云ふ、大文
言宋か家宋。
本宋か陸新れんあつて行く。夜半早く行くか
沿らん行く。重要な分宋のもか行く。分宋
いな。北京。基祝に簡家である。正月は地を
ちきもあつてい祝を祝る。
正新基祝に石の色は白餅の汁（トクク汁）であ
る。

四神

あるもあつたもあるけれども色々なもの。
色はあ緑あるもあつた。同様ではな（基本色）
新基外の特別同様の年基色。
年に年基男色にみして。宋家では男、宋
家ではは。男は宋家の祝をする丈。
その日の接客の元者は過歳を白家にすまし
ましたかと云ふ。

サンプリは元旦—十五日までいんちし。
他色にやはら正月とはならぬ。
厄年の人は正月とは限らぬ。
正月は色紙をし。

マチ

クラブ

サンプリ

トクク汁

サンプリ

立春のね

あんなもせず。二十年しるしは名命を「に書いた。
印刷の名前に書いてもらって下さ。

十五日ぐらいをやる。宋の国、仏人の立の
「海の国」をやる。今は三人は年。
「土壇亭秘決」は仏。法文の解釈書による。
「法」。金木土水の算木による。大抵やって世界。

十四日の夜の五数に入れて左。入れるのは神
多くかよくつく。その算木の下を相(立)神と
とる。

(数字を一つずつ箱の中に入れて、なんの方
法みを立てたんか。法むはよくない。数を
いう。十四日にやる。

十五日(ホ)には何もせぬ。
立筆、数防はない。仏寺にたくさん数防
はあった。一絶のサルプリ、巫部又は神耳
たのむ。

十六日の見神日はない。さんからない。
巫部は今年ない。四十一年前になくなった。
神耳は居る。陳孫士は居ない。
神耳は巫部 巫部は居る

サんつりは亟は生たるか、神亟かやる。
亟ゝたらかゞ人かある。

越前

炬燵（十五日）行く。柿とらは生きくて出まぬ。
炬燵は早く出まぬ。（十五日夕）
部落対抗ゝや。道は多くやゝに出をつけて
火のついたイマツを今より膳員はしりぞく
ちかぬ。膳は手材をかゝる髪かやか
小ぬ。鉢巻ゝ。
まゝ部中に全度はとゝ大柱あゝ。その大柱の泥
の越前
踏稿は今ゝもやゝ。成巻ゝは成巻ゝ。この
外徒所ゝいのる。その年の男厄をかせゝ。十五日
の夜徒所ゝいのる。その日をはじめて見
人ゝ男のみを考ゝ。踏稿は男をせゝうしやゝ。
老部屋やゝ。
永部屋は今ゝは考ゝ。前に書ゝやゝ。（今ゝも
中南部落ゝ）

寺はこの附近にゝ。遠くにあるゝ男百姓
に行く。男世者に行く。俗村も行く。
七里半 昔は俗村行かなかゝ。昔は男も行かぬ。
の上六宿 百石中一二石行く。三四十年ぶり。
七宝山 俗ゝ地蔵ゝ。不動ゝ。
国分寺
神宮寺の寺泊の石仏寺。
上南

二月

仕事は四月始め、
二月に新しい仕事はない。
二月に家を買ひ、物をはじめてやる。世帯を
持つ。石炭青かき改造。炭は一つは家を買ひ
一緒に家を買は三月。
四月の時。自宅でやる。
終り始まる。割合忙しい。肥料の運搬
手伝ひ。
下雪前にカナ戸は石陽洞成 徒洞 明洞
下坪洞に戻る。二三戸は苦から前洞にあた。
直ぐ仕面面に苦から洞に苦から(苦)
行る清明と寒食は同日又は一日違い。
清明墓参りをして親戚と墓の掃
きをやる。
寒食ともしき風として火をたかぬ餅を食はぬ
かあるお餅はさんすはし。今子餅のよう
になる。ヒヤ餅食はぬのは私る年寒の。
三月中に歩みのは清明寒食又。卵孵行
るは安。
十月一日にモスムの踊る。二月一日に歩きする
はなし。主人が休む日にはモスムし休む。
蠶の日には節供ととりやめる。行る仕
なし。虫が出ず蠶をする日。

教典の
春秋二回、二月と八月。（今は分ナ
毎年要する五十名、四年度分は
即授財産六万四千坪から。
毎年二千円位の利のあり、春の祭典費は
足りざる。所年は春秋二回で九十円。それ
で祭典費には四円位なれども。茶菓代等が多く
て盛大に行なわ。自分は不満とする。
信徒全部強制もやる。全の住宅は狭いや。
自分達は大体は知らぬ。
春秋の祭典費は合計は二回で七百円。最
少限、多い時は千円以上。去年は八百円
移した。この分は年々殖えん。除一孔で
二万円位。
飲料は四倍もいやる。宋の別でもや。中設。
信徒は郡内各地から泊りかけて来る。ねる人
は寄付や知人の宅に泊る。郡字の部部
亜部に一名の人数。部は人数又は点点。
今日は年の十四。
別一月号に四倍もいる点の点数の増加。
神道学は上部宮と都城神典司宮大往人
です。以上四十八名位
学部は十名（各部一人）三年。
点数は任期なし。
毎月の点数又は授宮かやる。授書式
毎月一日十五。
春の祭典毎に信徒達全部参加

道路修理出役日とする

（改革後）

一日耕地は八人から（千坪）で麦一石五斗（搗く）ものつけば四斗。

八人から一反（一反ハンチム）百坪は一畝とする。

麦は大豆の間作をやる。大豆が一八人から二石五斗。

（改革後）

収穫高が大分多くなり、十二三斗出ず。ニンニクを作る。野菜を出すと、ナチンバは安くなる。安くなるのは人は社会。昔から世界の中同じかもしれ。明治政府になってニンニクを作る。ニンニク石は革の道地はこれでもあるのそのあとがある。反当の収入はこれの多い。他より倍以上の収穫がある。明治は二百八十九俵。

三月

（明治九年）

年の秋耕をやっとこころに寸し鍬を入れて麦を蒔く。三月麦を刈れば土はかぶせ。麦の作付は多くとる。麦と豆まと一年交替。今年麦、来年豆。こ、では麦を作れ。多くの戸平均耕地二丁。畑、田、畑は麦が発芽すると搗く。畑は麦が発芽すると搗く。三月末四月上旬にかけて苗代の準備、麦の前に搗く。三月は搗きいそがしい。

一八人からの麦の搗き賃に手の取れる人よりこの方が多い。二日位かゝる。多くは二人（六八人から）でする十二日かゝる。

大豆の搗き賃は一八人から二日かゝる。苗代をつくるのは千坪二三日。今でも苗代でなくて多くは戸でやる。多くは戸でやる。麦は多くいから四月末から。

（明治九年）

行事

三月三日は何せぬ。彼岸もせぬ。

上社日とは名よ何もせぬ。

苗代を作るときに神を祭る。

花祭はやらぬ。多忙。

三月三日新しのつもり。

井戸法へ出向いやる。

和りはない。

（三月三日雪解けの時）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

⑩

竹々邑 芝村 近州黄玄氏
中西面 訖典里 楊州金氏
成川郡 雲泉面 柳峴洞 韓氏
同面大坪里 — 密陽朴氏
同面了洞里 — 嚴氏 尹氏
平安郡 東松面一帯にある 延安車氏
同面白石 文河金氏
面一作にある — 金氏
海蘇面 内徐里 — 宋氏
東松面 重徳里 — 申氏
検山面 楮山里 — 崔氏
安州郡 新安州面 松城 順興安氏
老海面 莞苑 — 林氏
安州郡 蓮洞 — 李氏
其他 全江 東郡にも住でゐる。
鳳洞面 鳳塘里 洪氏
江東郡 ?坎面の 尹氏
江東郡 高泉面 立徳里の 昌原黄氏

お寺人は泊つ宿がある。
檀家が寺の為の財産の倉を契約してある。
その作の家ん泊りつ。今は主の人は三ろ来れれに
なつてゐる。
寺には一二名住しか（檀家たちの）がゐない。
昔はゐたのに。今は弱くなり檀家はなくなつた。然しては
ゐないやうな。
僧は寺の財産があるから、寺の役をする。
し米を貰ふ。それは杯やうさい。それで本檀経先存
檀家呼びかせぐ。

共同作業調

部落のまはりと附近とをさす。
地区とは一つの部落の事。
地形形勢。

田畑
北門洞　三十七八戸
東門洞　五十三戸
水辺洞　三十八戸
三鷲洞　四十戸
柱瓦洞　三十八戸
岩山洞　三十六戸
洞　三十八戸

田畑の所　七部落
畑の所　七部落

附近　隣戸　時々
附近　部落の事。
附近とは、部落の事。
洞＝附近
畑の所　部落この通りです。

2月

田植が初まる。　田植のあとの仕事。
畑の除草。
麦の刈りはじめ。
田植の時に多は人手を。
田植にはフレはない。若かりなへ。たまにフマシはあるかもしれない。やはりにも人手フマシなし。
農人夫を雇ふ。今は給料一日五円。三食付はして。洞内の人も雇ふのが、昔から定れ
昔は考知恵、田人知るかあつん。
畑作陸洞又は洞内から雇ふ。（すきのあい
大人をやとう。
御結（手伝ひ多き手伝）は四月の時にやる。
ヒヤンド
病人で困る。家のおん、夢信が、なり農民を喜ぶ。夢陸なしやっていやる。それを
附近とは。今でしや。家のお夢の社
プログン
などにも附近をやる。五月でやる。今
ちょうど十月以下の死人の時も陸プログンでや。
その時はヒヤンドはやらぬ。
家の連絡。病人ある時、子か国の時、やる。
岩大地様の時は夢信が今でし、公共の
宮附ん指揮する。附近は国
なしなしが、近くん兵ん隣国族、

行き

年には、四、五、六の三ヶ日は休む。
四日から三日に業を始めて行く。
之日は毎年の通り。
男は明戦（アンスラ）、大きい子供も行く。
女はフランコをやる。
明戦は各仕人でやる。ところの中人が接ぎやる。子供も仕事人も男老若男女皆仕事する。勝ったら経済が「行く。
五人接ぎの、ルールは毎年変わる。（明石洞の市民会）
夜之後は高人和会でやる。僕名は之、洞から宿公寄まから。
明川洞は十一ヶ月見（他所のしのも）
文芸部。
明戦とは角力の。
明戦大会の会長がいるその時に出まる。
名称は「角力集団」。
名称は「角力の。
毎年は毎年やるが他にも陸戦やる。
毎年になってからやる。
女のフランコは角力の外の所の所。
見物人は男と女と角力やフランコとも行く。
フランコは名称。
面白い。陸戦するのは毎年。
僕は
長なって待ってる。
厚生も写真まってる。
今年は
僕は

第三部

第三部

第三部

うるわは四五六日位せめ。
昔は池作りは四月。作る。又。みんで作る。
一日で出来る。
近年のり鮒とは女鯉（コモチ　私の定義）なもの
と餌をつく。
余て私なはならい。

六月

麦の収穫、田の除草（六月一七日）三回乃至四回（二回）
四回行ふ。二回かるい。
除草取り（若者は[illegible]）。昭和[illegible]
二十日迄にする。
麦の収穫は六月中旬、すぐ脱穀、秋の
草畑の播種。
一八日からの麦の収穫は一日。
中は出来の一年位しておく。
上旬田草取り 中旬麦の収穫 下旬田草取。

十五日の[illegible]には何もせぬ。祝宴もせぬ。
田神祭りもない。休みもやらぬ。大も食はぬ。川遊もなし。
休の時に餅を食ふ家もある。
六月は何もない。

十二月

藁細工、縄、農具の修理、
十二月始頃（臘月）、豚を殺し臘肉を作る。豚油を壺に入れて保存する。
雪解の水を保存する。夏まで。薬用にする。
海岸地帯では一年中の水を蓄へる。[illegible]
大晦日には寝ない。左からの縄を作って家の[illegible]につけておく、鬼が入らぬようにする。
大晦日の夜、餅を食ふ。[illegible]正月準備の餅を食ふ。歳暮を贈る。自分の家の者なんかやる。その[illegible]なんかをもって

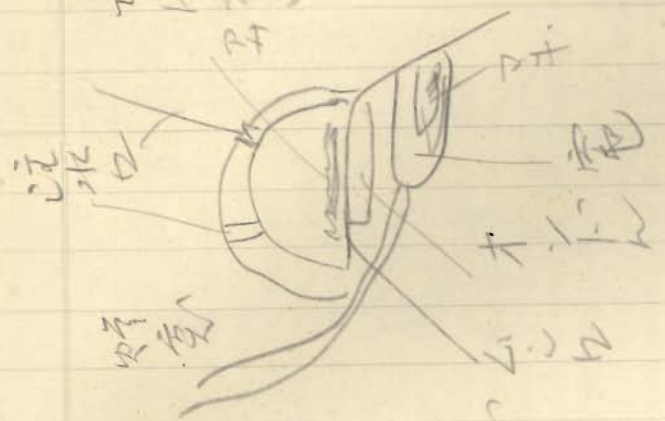
今年は田植の最中である。

七月

水田と雲の陰多し。上旬は
仲旬から新代。八月下旬まで。
土地の者は代り。新米を知る。七八月
苗代から各戸自由の時。八月過ぎれば新代
はなまる。
八月になると夜寒のしかけて来るので世話の使ふ
ヤくなる。寒まついたんで。この頃で寒くなる。
山をまつるではない。

山神祭は七夕の日か其の前日やる。祭り
方は大体九月の祭と同じ。
男も女も行く。女は肉は山に行く。餞物は
山で弁当。まつる金印が書きて飾る。
肉は牛と書く。年に一つ。多く。家に分け
てさしげる。それを食べて各戸に分ける。
それで肉は飲物する。大印は村に一つ。
その日は殺生をおそれて「なまぐさい」。酒もまくは
肉は出さない。まみそ豆腐は食べる。
山で肉の一印の肉は喜ぶ。
至誠は一日休み。去年の夏しやった。
世話の者はやった。
年寄年に至誠は多。
七夕の行事は私は知らない。和歌を。
白中は付少ない。まだ付もない。
白中物もない。

[illegible]


眼球
視神経
網膜
脈絡膜
強膜
角膜
虹彩
水晶体

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月

上旬は苗代の仕事
秋夕のかゆ、ぬかもち。
大豆の収穫。

大豆は九月にのる。畑は中下旬、風の早く収穫をあせる。稲は下旬から九月上旬、大豆が九月中旬以後。米は中下旬、風の早すぎる。秋高の収穫。モロコシは八月下旬。八月は仕事に多忙。一年中一番多忙は八月と三四月である。

九

朝の間に宋経を印刷する。

秋夕、墓参をやる。一日休み。仕事に多忙の人は遠出をする。この時に秋夕の子供をセとは云はぬ。この頃の子供をやる。つまり商人はやっぱり年の時の稼ぎ時。砂糖はやっぱり。仕事に印刷を作り三人任で印刷。商人とつまり。餅を作る。牛豚し殺す。印刷で一部買。それを会戸に多忙である。明かな。それで終り迄。

モロコシ

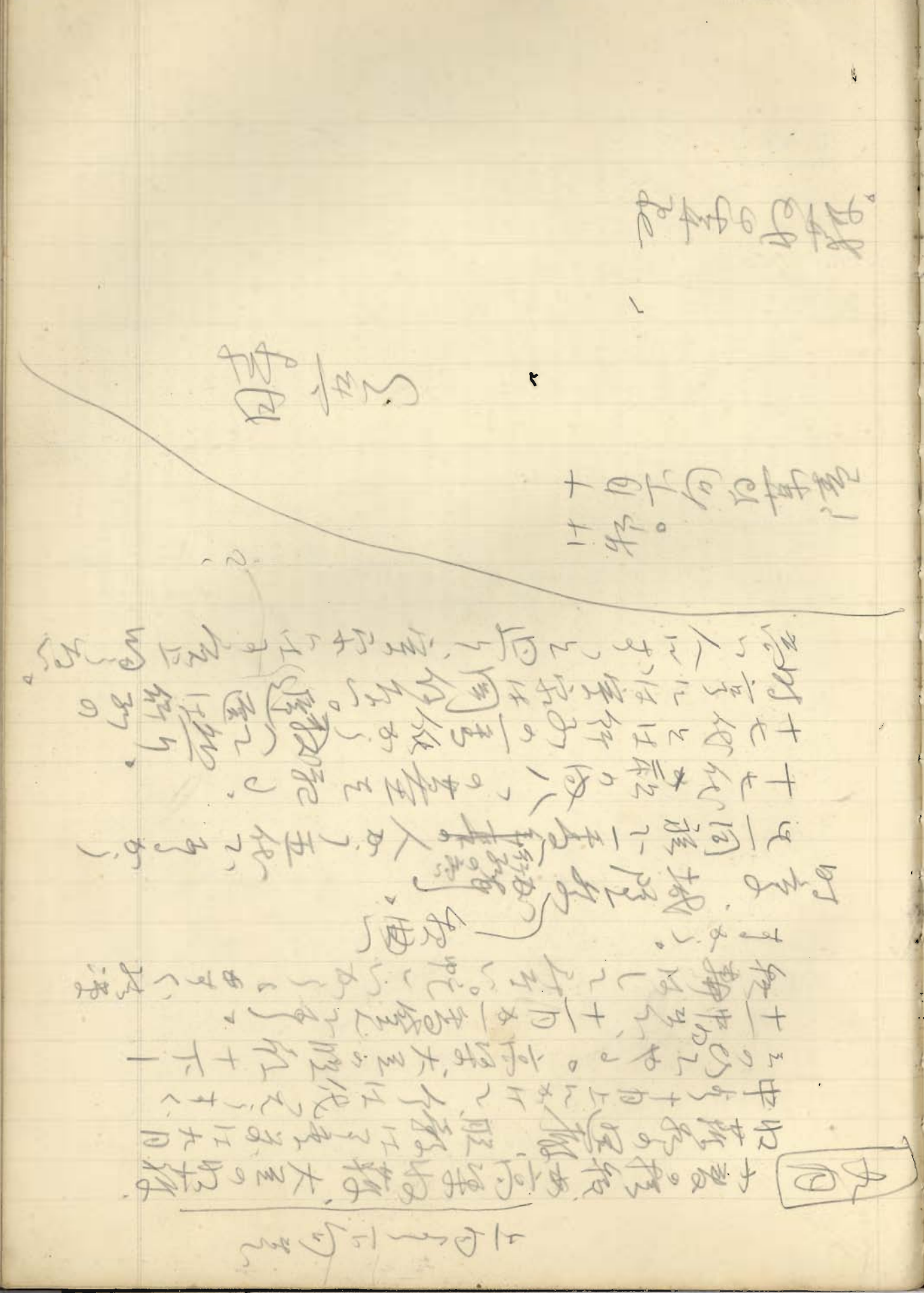
八月

秋夕のかゆ、ぬかもち。
大豆の収穫。

家宗は萬事の家と同じ。家宗の主人は
ほかの位牌もなし。家宗の総領は
は家宗が所有の代表である。
時々の祭には山へ登った人の中で最年上
の三人が務める。一人を執事とする。三人は
其の外に若い人の大
血色の世話し、社交もよむ。三人は就任
がなされて居る。
こうての長老の時事は三四名にも過ぎず
しかし今は百人位。他道に行った人も七十名余
はいって来た人もある。今はない。
平常から時々(三郎落ちて)帰るが
比郎は(三郎落)百人。比企内では
他に十数人。部内ではなし。他郎に移る
百人(トクセン郎、カイセン郎)江海道を合して
約。平均人二十人位。(三十年前家族
総勢の頃は四百人位。之れが今ではよく分らなく
なって。)
家型の範囲
民はさん、比カイセン郎から平坂から代わりたか
まで見た。今は二家。

九月

思事、八月の収穫の経緯。脱穀する時である。 運搬
その他の行事はない。非常に忙しい。
九日まであるから。
九日(重陽)節句もない。秋社日もない。
収穫祭はない。之れ以後もない。
(震災の上にも千を加へつけさす。十月の行事である)
九月は未だ非常に多忙
時宜は九日か十九日にやる。門中でも
やる。金土のある墓もある。
他地へ行って、出稼先に納って来る。
重陽の事は九日と云ふ。墓参を九日
十九日を雨九日と云ふ。
カスは雨九日に行み。



十月

十日のつゝき。

十月十五日かけ出掛（十月より）

せんせ手はを。

縄やはなをたゝめ。

紙

長さに新聞を行の。ゆ三をつくる。

大きはやらめ。休日とする。

十月

十三日の夕方に

月は東の空に

十四日

十四日は月の出

十五日は月の出

月は東の空に

十六日

十六日の夕方

月の出

十七日

十七日は月の出

十八日

十八日の夕方

月の出

十九日

十九日の夕方

月の出

二十日

二十日の夕方

月の出

二十一日

二十一日の夕方

月の出

二十二日

二十二日の夕方

月の出

二十三日

二十三日の夕方

月の出

二十四日

二十四日の夕方

月の出

二十五日

二十五日の夕方

月の出

二十六日

二十六日の夕方

月の出

二十七日

二十七日の夕方

月の出

二十八日

二十八日の夕方

月の出

二十九日

二十九日の夕方

月の出

三十日

三十日の夕方

月の出

十月

十一日

十一月

十一月の夕方

月の出

十二日

十二月の夕方

月の出

十三日

十三月の夕方

月の出

十四日

十四月の夕方

月の出

十五日

十五月の夕方

月の出

十六日

十六月の夕方

月の出

十七日

十七月の夕方

月の出

十八日

十八月の夕方

月の出

十九日

十九月の夕方

月の出

二十日

二十月の夕方

月の出

二十一日

二十一月の夕方

月の出

二十二日

二十二月の夕方

月の出

二十三日

二十三月の夕方

月の出

二十四日

二十四月の夕方

月の出

二十五日

二十五月の夕方

月の出

二十六日

二十六月の夕方

月の出

二十七日

二十七月の夕方

月の出

二十八日

二十八月の夕方

月の出

二十九日

二十九月の夕方

月の出

三十日

三十月の夕方

月の出

四の日は
一般に三回
まくらことばは
四五回

プマレを挑れよし
ます。

○九十七六度位
最高一度下旬一七日末
最高一十二度下旬一一月上旬
○下三十六度位

一番好時
三月上九月
（定植適期）

ゼンゼンは何もなし。
七月に城陽の新発、低行庭の時と。仔牛の
時と同じ。歪なとまず。休まず。
白仲、五年の方し。何もなし。休まず。
り和泉も方。

七月

蕪菜の播種、大豆畑除草、小豆除草。
八日播く。まもろこしを食べはじめる。
城陽の芝刈り。牧草の芝刈り。
牛の飼料を毎日その日の分を刈りとる。
牧の枝葉をとる（牧タン沢の村例）
の頃 春の牧苗 ↑芝を植く。

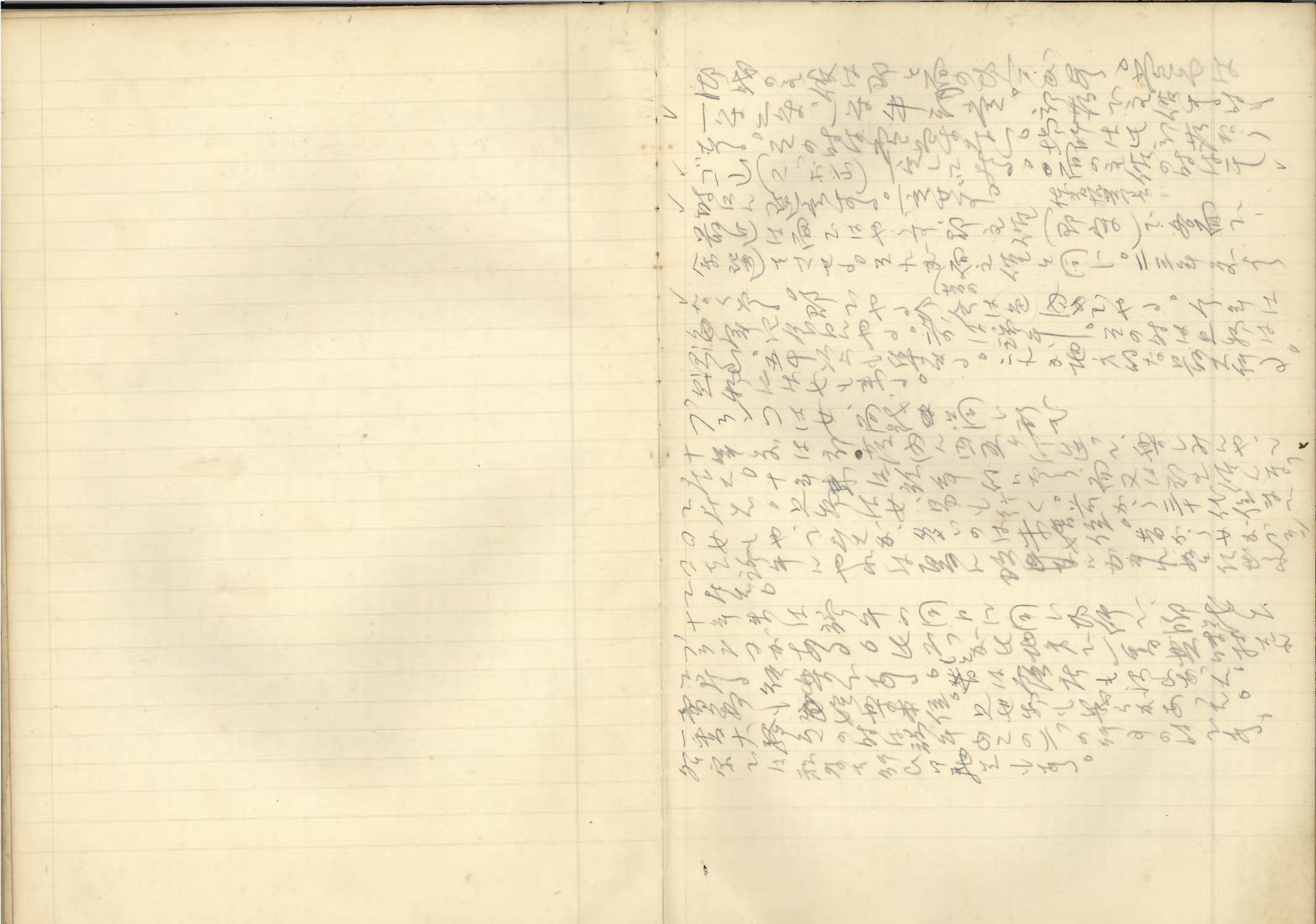
七月

芭蕉翁書は三月七日二回
初花終りてやる。
井戸は二尺ヘ一井戸ヘ抑上ポンプ。
五十人ヲ二十人ヲ仕事。

六月

水田除草、畑の中耕、発土、大麻の収穫調製
上旬は麦刈。麦の脱穀調製。馬鈴薯の収穫
番小

六月十三日迄苗は行せず、植付なし。
代掻(ポンノリ)は大を三代に。山に登って無なし
大を食い酒をのんでヤと。五人十人が一組になって
ためをためて耕起して大を山やゆ迄行く。
この日は誠ってえ酒をうまい。男女手伝。
各家庭は何かせめ。他の人は交印仕事。
あんそ日代日ではない。春蒔を大麻代迄をする。
初代のはんはの汁の臭い時に食べ汁を流せば、
かゆけれ、ならとくせふ。



田植丸の休みは何日ない。平日より
「ふり廻しを会ふの事。地方により異る。
休日は殆んない。
多忙の月の晩、
五、九、四、六、七。
1 2 3 4
一番閑な月、十二月、一月、二月
1 2 3

女の労働、
子守は女と田んぼ。苗取りは女。
若しくは苗取りを女がして居た。今は
それが除地 田の除草も女した。
田の畑も男も女。
耕作のりコーラー、コーサイ両方のみ
外は苗代田。女は畑と云ふので若
かしの他は区分なし若かった

若い見作男としては　ますます、
工事兵、ブマンを死ぬのみ。今年は
来ない。

五月 田植、畑の除草、養蚕の桑摘み、施肥。
五月下旬六月上旬麦の刈入れ。
つしは衣ない。ブマミはある。
平等郎、安シュウ郎、那土軍。新婦の働け
人は色付ける。四月よりいそがしい。
田植の時は若か〜人来れ来て居るが今年から表で一つの
どうしやめかもだ。(以上)
近年
子供等、やる人もあるやらぬ人もある。
田大名節は元旦、新年、定会、桃の節、
え日と端午は生まれた子の遊ぶ日とし生けれ、
浮人と秋の生死んだ人の名節、盆の行事
お祝等は大した事はないが、親戚のやり方は元
日や会合なし。
休日四五三の事は大人は四五両日、今は
五日位。
若者は田よりもの休みが
ある。祖父の内、日毎やかに揮行する、かわかして一年
の事とする。お七ユーのモグサいれる。せんじて
年。よくもなく。
若い母等を集う。子供を産んでし、良い様
集した、はじめ、かる。今も今年や
男は面白、女はフランつ。
(スモモ)

「朝顔の[illegible]」年中行事[illegible]。

「山[illegible]」年中行事[illegible]

「荊楚歳時記」

「歳華紀麗」

「[illegible]」王[illegible]

「江戸[illegible]」（大江匡房）

「公事根源」（一條兼良）

「日本歳時記」

[illegible]「朝顔[illegible]」年中行事[illegible]

[illegible]「朝顔[illegible]」

「朝顔[illegible]記」[illegible]

[illegible]「朝顔の年中行事」

大正四年一月．五．十月　四年十一月）「朝顔に於ける年中行事」

「朝顔」[illegible]

[illegible]「朝顔の[illegible]」

[illegible]「[illegible]」に年中行事[illegible]

P.451—P.433 [illegible]年中行事[illegible]

「[illegible]」[illegible]「朝顔[illegible]」大正[illegible]

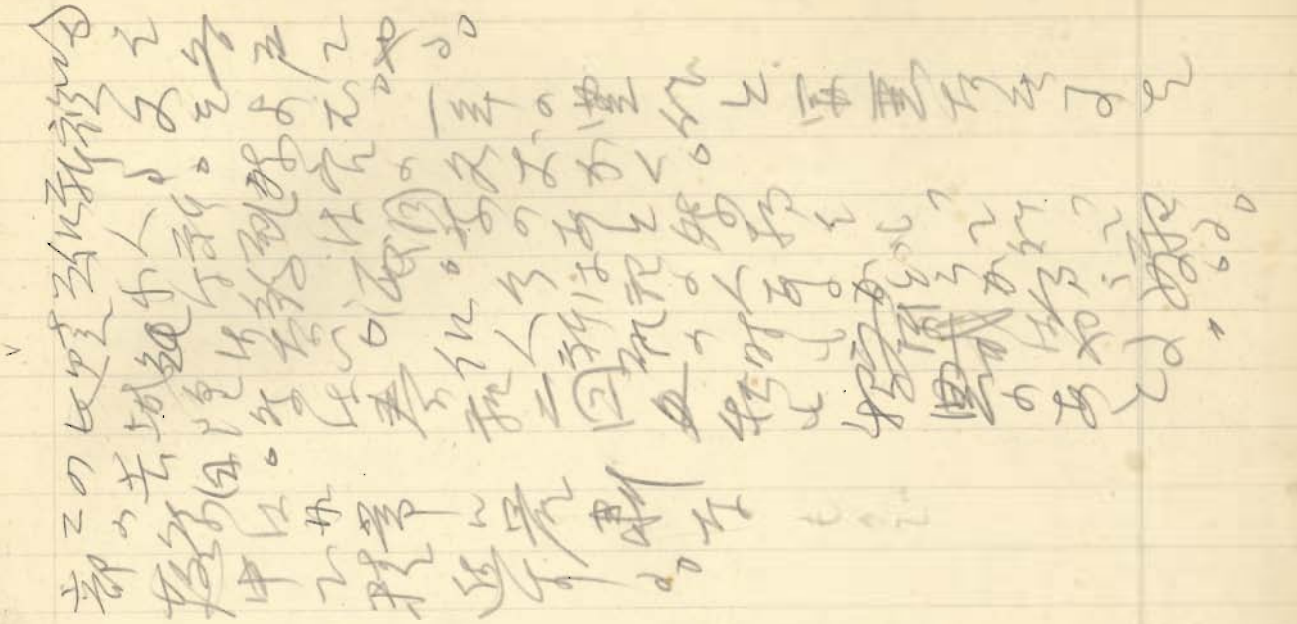
大阪の[illegible]

四月

一年中の大気の時。[illegible]の時と同様[illegible]昔代の[illegible]。田の[illegible]を[illegible]し。芒種[illegible]これから十日ほどは[illegible]の畑を[illegible]かへせねばならぬ。[illegible]、[illegible]大豆、[illegible]も[illegible]。小豆、綿。[illegible]。肥料運搬。[illegible]も[illegible]。四月で[illegible]も此月を[illegible]。[illegible]も[illegible]。

四月八日、寺まつりせぬ。行事としては再拝あり。[illegible]をつけ酒をのむ男丈。気のある者[illegible]。大きな[illegible]の。[illegible]をも[illegible]。一[illegible]に何も世の。[illegible]はない。[illegible]の行事として[illegible]見物には行く。[illegible]はある。[illegible]に行く。[illegible]子岩に行く人もある。[illegible]と岩に[illegible]。[illegible]に[illegible]。又[illegible]自然の[illegible]。[illegible]は[illegible]、白い紙をかけて来よ。[illegible]はよく[illegible]。[illegible]の言葉[illegible]。

四月に[illegible]作って食み[illegible]。



トヤコ（そこは土神様とそのしゝ）は三月上旬の吉日を
ゝしゝ名戸で立婦人屋敷に入を立て祭をし
ゝき祝を供へ新や酒を供へ祝を行ふ。立婦
人は祝。のこりを宗教中で飲酒する。この時ん
は泥田の白砂と黄土をまぜて庭にまく。中庭へ
き。

城隍祭　三月十五日の吉日（三所部男女あ
と。同祭。
祭物は牛肉酒米。
祭宮は四五名の執事が「巡宮」をおせ
る。祭宮は二人と執事も三人
記ふのは男子は年寄りから若い方から
執事の人かな。
執事は祭宮を合はす。同私を合はす。人の
屋敷をとる。夫婦丘ようす。当日は沐浴もす。
城隍は大きな木その下ん塩を作る。
私百年前ん祀をた。そこんは人をへんす。ね木
ちゃ神体としては一本。ソナンクンナムは男
その木。神体のオソナンナム。大松松の木。
すきゃるこはそこん行ってやっと。今はやらぬ。
行った時は
祝は（午前四時）
祭宮は行って年寄。さんん、ん、そこんれ私
庭各戸人は行く。各部の分花をうけ
飲物は同家の白砂宮よりやる。皆はふん

支那の旅の宿

昭和四拾五年一月拾五日

立教十人登録

第二回十八枚

百廣寺

三月

百姓、塩の話。

今年の春は、三月ゆんで、畑を作る。北海道も段々として畑を作る。

大きな百姓の持地。

一町歩を買いて、多忙。私の行動にて

小生の事である。

三月三日より（九日九日やる、第二回）

五地方の基本である。十年前なら、第二回

昔（三四十年前）は農業をやった。

今は上旬の節句はしめ。家内の

祝なもせぬ。

私四一 作中氏行方は全部作物。

柳宴（二三十年前）は大分多数四人の西地。

今は寂しい。今は父なし人丈か

れ。今は父母もなしめ。

傳牧野になってから昔の人は過去した。

今の作物は大分作物なっている。

新宮氏行方なっ人の人なる。

この部分は先日の会にもせず。

昔は氏行方へ書簡を出す。

今ではこの人は私は出せなくなる。

福をやり一絵流す。昔は燐を用ゐ。部落で隣
立ち乱れて居る。静しくにや。老人や親生の中
を色々新しくのもええ宮女等して。山から帰っては
宮女はるっても子孫の男は老若皆行く。電気と
松の木は女も行く。女は依然として働きかける丈。時ならず丈
は男丈である。
電気すぎて玉ころまで一かやかくも大王を接く。
その時御手足しながら拝く。

清明の日の行事は無い。

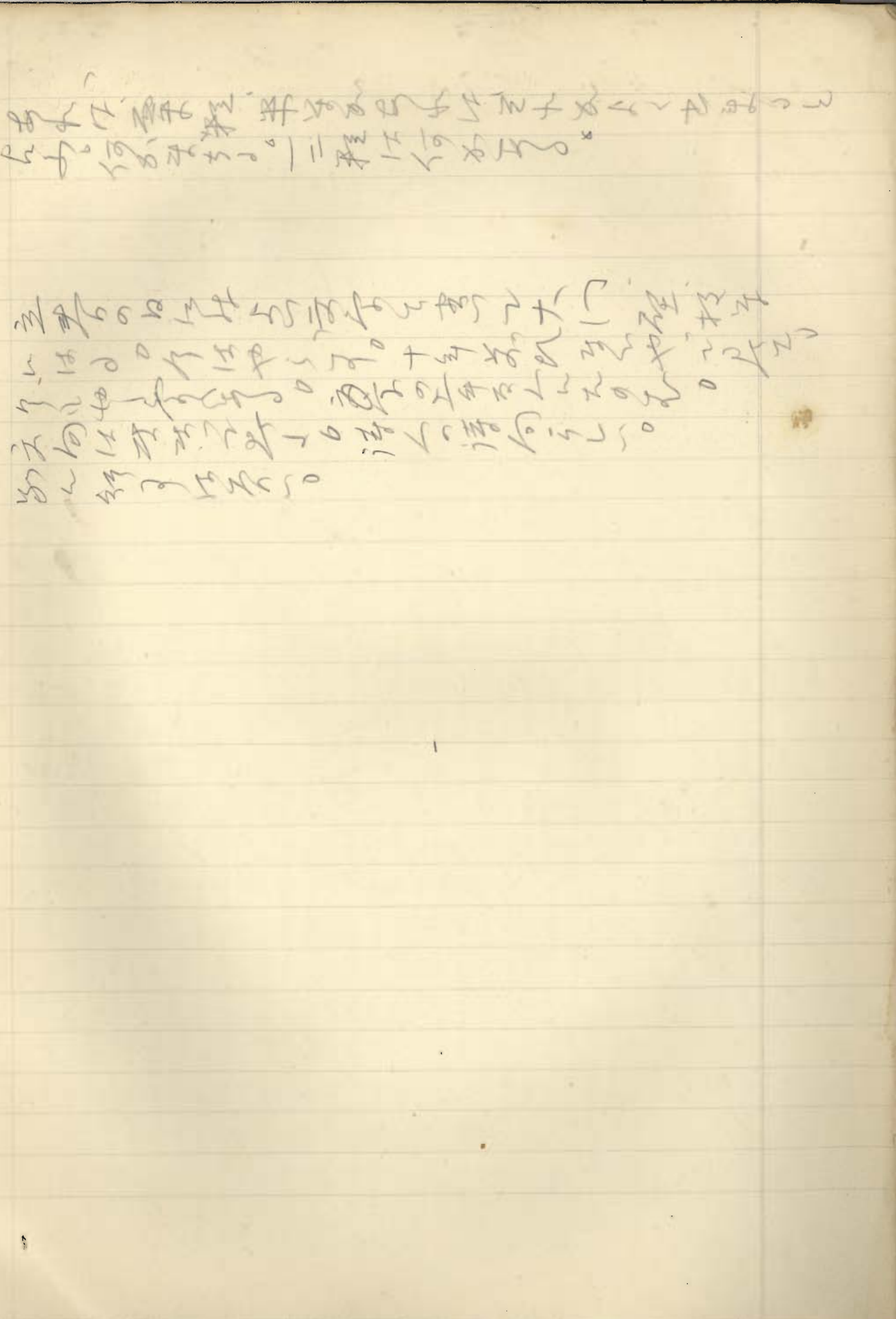
座敷ん冷飯食ふことは世ぬ。

五代目の墓は屋敷
内の二回
廻廊
九人七代
前の墓なるべつ

紀年墓銘工、昭和年間（仲基等を迎ふ）
今は工ア彩墓銘工。墓は如何ほど
今はもやう。以上
宮会員から会員の修理を始める。四月終
墓と大きは五月にて指定。

一日は一日休み。行くはいかよく会いよく遊ぶ
ゴルフ遊ぶ。ニュ宮で遊ぶ面白い遊園地
鳥が出るぞ。鳥が出ないか。会へば
中不二の鉄道高速で行く。鉄道
キミチはたへぬるなる。多大へるとは居ま
かゆくなるとなけれ。

宮会員郡内く宮で祝祭し、お墓にまいる。
形式宮は本殿に行くまつる。五代目の墓にまいる。
祝詞はうをます。
神位はまるのは上段の宮よ。（四宮）宮廻は
代目は左へ。附近の郡表れ一つ。宮廻も一宮
をもって、まるのは此方で五六戸。外見のみ
墓を他へ。ゆらず。本の神位は内に柵をお
いて、夫を一部つ、中に方もなかはは
さらして。その他は紙の板をその中に作る。
式は一宮にまは時はその宮で。内廻郡ひ今は内廻で。
この四は大変はない。
その墓のみは四分長なる郡。高い方が
紀元は郡。大体一日ってます。
一日今んなく墓まはそれなをすませ後



てくる。十五日の一日は、おんなじようなもの。十五日夜の祭り、夢仏を供へる。十五年まで、
あくる、宮へ出やる。自分らやこの本家クンチ
に行く。この本家又その本家にはいつも行く。戸数の多い
程大本家に行く。大本家では親戚に会はぬ
は親おもはず。そこで祭りは年。四元の年も
大体に行く。宮会、祭り年、秋夕、五月五日、秋夕、
年とて一番大きい。祭礼、秋夕、新年でやって
来ると、山へ行く。秋夕は四月月。
梅をせおやる。子をねはやらぬ。
陸軍(蛇)(国道)(すごろく)をやる。男の新作をかるや
十五日月(四)へ出かやる、月を山に出かる男のことを
言ふ。十五日んたこをあげる。一年の厄除の文字を書く
てもらう。夕つのすくてに線をかけてそれでされる。
厄祓いんす。男のよめこ
十五日の夕方のはんオブシキ(道具会)をやる。神
前、紙に自分の姓名を書いて、位を年歳のまわりの
のもつをつみ、川の湯の中に地める。
豊四の占い、十四日に行ひ二枚す。
キビガラの中に十二位の豆をはさみ一応中浄湯の中
につけ、聖日をのぞくを夕方をとて、ぬくめは豆の
月は雨なる。多雨では田よくなる。知位は
雨なくても出る。主人が行ひ。
庚をもつてあるいは中おとして、男のかく十四日
の日高くをうんつる。この中の中に庚れのえんぶ
うとも。十五日に見る。新礼のつぶが入れて

[illegible]

順川郡仙[illegible]面

正月

元日から十五日迄の事節には遊んで居た。今は
今は三日と十五日のみ休む。以前から[illegible]
作る。
十五日以前は[illegible]
二月三日[illegible]三月中[illegible]して居る。
元日は祖先[illegible]（部位[illegible]祭物を供へ）
もとは豚を用ひたが今は用ひない。[illegible]
十五日[illegible]
二三年[illegible]年上の者は[illegible]
[illegible]わる。これは五十戸。
[illegible]
[illegible]又[illegible]
大[illegible]
[illegible]
[illegible]一年の主な[illegible]
[illegible]
その[illegible]十日[illegible]
日[illegible]
十四日[illegible]
と[illegible]十年[illegible]又[illegible]
[illegible]
の[illegible]十四日[illegible]
十四日の[illegible]